

支部長会議 日時：4月2日(土)午後5・30より。場所：学士会館分館。出席者：浅田会長，森永(北海道)，的場(東北)，橋浦(北陸)，佐藤(東海)，沢村(関西)，竹本(中国・四国)，堀田(九州)，各支部長，支部理事，ほか本部理事あわせて13名。

議事：Ⅰ．本部よりの報告。Ⅱ．各支部の事業，運営状況報告。Ⅲ．本部支部間の連絡について。Ⅳ．本会の事業運営，その他本会発展に関する意見。議事を終つて懇談に移り，意見の交換をおこなつた。

第2回理事会 日時：4月22日(金)午後4・45より。場所：協会会議室。出席者：浅田会長ほか14名。

報告事項：Ⅰ．企画委員会に関する件。Ⅱ．強度と疲労シンポジウムに関する件。Ⅲ．特許局長官に学術団体指定申請書提出の件。Ⅳ．日本学術会議会長に国際会議出席者推薦の件。Ⅴ．英国鉄鋼協会々員 Heselwood 氏来日に関する件。

協議事項：Ⅰ．理事の職務分業に関する件。Ⅱ．常務委員，編集委員および企画委員任期満了につき委嘱の件。Ⅲ．定例理事会，編集委員会および企画委員会開催日の件。Ⅳ．金属学会との連絡懇談会に関する件。Ⅴ．3月中収支決算の件。Ⅵ．3月中入退会その他会員異動の件。

第1回企画委員会 日時：3月29日(火)午後5時より。場所：協会会議室。出席者：伊木理事ほか7名。

協議事項：Ⅰ．鉄鋼技術研究体制に関する座談会について。Ⅱ．科学技術会議のアンケートについて。Ⅲ．ソ連文献翻訳について。

第2回編集委員会 日時：4月26日(火)午後5時より。場所：協会々議室。出席者：佐藤理事ほか15名。

報告事項：Ⅰ．昭和35年4月号完成，および昭和35年5月号完成予定の件。Ⅱ．第58回秋季講演大会依頼論文の件。Ⅲ．Herbert Briefs 氏講演原稿の件。

協議事項：Ⅰ．論文調査報告。Ⅱ．昭和35年6月号掲載論文選定の件。Ⅲ．鉄鋼技術共同研究会報告の件。Ⅳ．第59回春季講演大会論文寄稿依頼の件。Ⅴ．寄稿規程原稿枚数に関する件。Ⅵ．原稿審査用紙に関する件。Ⅶ．造船協会，造船工業会，海事協会受賞候補推薦の件。

第45回通常総会における表彰者表彰理由書

渡辺義介賞受領者

特殊製鋼株式会社社長

石原 米太郎君

特殊鋼事業の運営ならびに技術の進歩に対する貢献

君は明治15年9月2日群馬県に生れ，実家が牧場を経営していたため東京麻布の獣医学校に入学したが，中途退学して明治37年8月官営八幡製鉄所に入所，大正4年日本特殊鋼株式会社に入社，大正13年同社を辞任して互光商會を創立，ついで昭和4年特殊製鋼株式会社を設立してその社長となり現在に至っている。

この間，八幡製鉄所においては日露戦争直後の陸軍の兵器独立の要請に応じ，わが国において初めての特殊鋼の研究，工業的製造に従事した。当時指導を受ける人もなく，数少ない海外の文献を頼りに，ルツボ，耐火煉瓦の試作や，特殊元素原料の探索などから始めて苦心研究した。日本特殊鋼株式会社の創立に当つては，押川製鉄所長官の推薦で技師長として民間最初の特殊鋼専門工場の建設に尽力した。その後独立して互光商會を創つたが，昭和4年これを発展的解消して特殊製鋼株式会社を設立し，今日まで技術および経営の第一線にあつて活躍している。この間の業績は枚挙に暇ないが，その中“鑄型押湯の電弧加熱による造塊作業の改良”外5件の発明特許の無償使用を許可したことは特筆すべきことである。またこの特許実施について八幡製鉄株式会社から贈られた1000万円をそのまま日本鉄鋼協会に寄贈し，これが今日石原研究資金として鉄鋼の研究試験のために使用されている。一方においては多くの公職，団体役員を歴任し，現在も日本鉄鋼連盟理事，部会長，武器生産審議会委員，産業合理化審議会委員部会長，科学技術参与

を兼ねている。特殊鋼業界に尽した功勞に対し，昭和28年には緑綬褒賞を，昭和34年には藍綬褒賞を授けられた。

以上の如く，君がわが国における特殊鋼の創始時代から50余年間終始一貫特殊鋼の技術的進歩，特殊鋼業の発展のために尽した功績は卓越したものであつて，日本鉄鋼協会表彰規程第7条の規定により渡辺義介賞を受ける資格十分であると認める。

服部賞受領者

八幡製鉄株式会社社長室理事

兼日本ウジミナス株式会社常務取締役技術局長

工学士 嶺 次 男君

圧延作業の技術改善および能率向上に対する貢献

君は昭和10年3月九州帝国大学工学部機械工学科を卒業して，八幡製鉄所に入り，条鋼部長，鋼材部長を経て，33年6月本社社長室に勤務すると共に日本ウジミナス株式会社常務取締役技術局長となり，現在に至っている。

この間，君は圧延作業の技術改善および作業能率向上に尽したが，特に条鋼部長に就任以来内外の市場の要請に応じた大形形鋼新品種の生産，圧延設備の合理化による製品コストの切下げに努力し，短期間に成果を挙げた。すなわち溶接造船の発達に伴い，溶接に適した形状の形鋼，特に不等辺不等厚山形鋼の製造が要請された。これは辺の長さのいちじるしい不均衡に，厚みの差が加わり圧延困難とされたものであるが，慎重な計画，設計の下にまず200mm×90mmの製造に成功，以来品種の種類も拡張している。溝形鋼矢板は施工上の限界があるので特異な性能をもつ直線形鋼矢板の製造を昭和30年から

開始、土木、建築界に大きい改革をもたらした。炭坑用としては昭和 27 年から坑梓用大形 I 形鋼を生産し、続いて更にこれより長所を有する可縮坑梓鋼を製造した。ワイドフランジビームについては、要請に応じて昭和 33 年 3 月 H300×150 および H300×300 の製造に成功、引続き製造計画推進中である。水深 9~12m の港湾構築用に使用される Z 形鋼矢板は昭和 33 年 3 月から製造に着手している。

一方、八幡製鉄所の条鋼関係各工場は操業以来特筆すべき改造は行なわれなかつたが、昭和 30 年以降、軌条、第 3 大型、第 2 中形、第 3 小形各工場の設備改良を実施し能力増大、作業能率、成品歩留の向上、原単位低下に貢献した。これよりさき、昭和 15 年には広畑製鉄所鋼板課製板係長としてわが国最初の広巾鋼連続圧延設備の建設を担当した。

以上の如く君の圧延技術の進歩発達に対する貢献は顕著であつて、日本鉄鋼協会表彰規程第 3 条の規定により服部賞を受ける資格十分であると認める。

香村賞受領者

日本鋼管株式会社川崎製鉄所製鋼部長

工学士 木下恒雄君

転炉製鋼技術に関する発明および考案

君は昭和 7 年 3 月東京帝国大学工学部冶金科卒業後、日本鋼管株式会社に入社、川崎製鉄所に勤務、製鋼第 2 課長、第 2 製鋼部長を経て、昭和 34 年 2 月製鋼部長となり現在に至っている。

この間専ら転炉製鋼の操業および技術の研究に従事し、技術の向上、製品品質の改善などに努力し、種々の考案および発明を行なつた。すなわち、昭和の初めわが国の屑鉄事情および燃料事情から不可能視されていたトーマス転炉の採用が日本鋼管において企画されたとき、その推進の中心となり、昭和 13 年トーマス転炉の操業に成功し、わが国に適する転炉製鋼技術の基礎を確立した。第 2 次大戦中、銑鉄がいちじるしく劣悪となつたが、操業法を改良して良好な成績を維持した。終戦後操業再開と同時に低窒素鋼の研究を行ない、ドイツの H P N 鋼に相当する優秀鋼の製造に成功した。昭和 28 年頃には転炉による酸素製鋼に成功し、転炉鋼を平炉鋼の分野まで進出させた。また数種の脱酸剤を一定順序に従つて用いるいわゆる階段式脱酸法を実施して効果を収めた。従来トーマス転炉では平炉銑の吹錬は不可能とされたが、独特の珪素吹の発明によりその吹錬に成功し、吹錬のさい螢石と鉄鉱石の使用により操業を容易にし、鋼質を改善する方法を考案した。また転炉の裏張りに国産ドロマイトを使用することに成功した。昭和 29 年頃から、その真価のまだ認められていなかった純酸素転炉製鋼法の将来性を予知し、同技術の採用および設備の建設を推進して、昭和 33 年その操業に成功、極めて良好な成績を収めた。純酸素転炉の炉体裏張りは普通マグネシヤを使用するが、研究の結果、国産ドロマイトの単独使用に成功した。一方、製鋼能率を高めるため重装入の研究を行ない、従来装入 1 t 当りの炉内容積 0.8~1.0 m³ を要するものとされていたのを 0.7 m³ まで低減した。

以上の如く君は転炉製鋼技術に関し多数の発明および

考案を行なつたもので、表彰規程第 4 条の規定により香村賞を受ける資格十分であると認める。

俵賞受領者

住友金属工業株式会社和歌山製造所研究試験課

研究員 理学博士 藤井毅彦君

脱炭反応の速度論的研究(論文)

君は昭和 23 年 3 月京都大学理学部化学科卒業後住友金属工業株式会社に入社、製鋼所研究課に勤務、28 年同社和歌山製造所研究試験課に転じ、34 年 8 月研究員となり現在に至っている。

君は製鋼反応の研究において、従来等閑にされがちであつた反応速度論的方面を取上げ、一つの見地から実際の塩基性平炉における脱炭反応を解析するために、確実な実験法を使つて測定精度を高め測定可能の範囲を広め、それによつて多くの貴重な測定結果を集積した。一方、実際操業に付随する条件の複雑性と偶然性を避けて、単純かつ明確な条件の下で脱炭反応を測定するために、巧妙な反応装置を作り、高温で長時間に亘る精密な測定を始めて可能にした。こうして得られた多量の成果から脱炭反応の機構を明らかにし、実際操業における脱炭反応理解の基礎を築いた。そして最後に脱炭反応においては溶鋼中の炭素と酸素と一酸化炭素間の平衡反応は非常に速く、むしろ鋼滓-溶鋼の界面と気相とを通じて、反応物質および生成物が移動する速度ならびに界面付近の拡散速度が重要であると結論している。これは製鋼反応論ならびに化学反応論に寄与するところ少なくない。

以上の研究は会誌「鉄と鋼」第 45 年第 8, 10, 11, 12 号および第 46 年第 1 号に論文として掲載され、昭和 34 年中における最も有益な論文と審定された。よつて君は日本鉄鋼協会表彰規程第 5 条の規定により俵賞を受ける資格十分であると認める。

渡辺三郎賞受領者

日本金属工業株式会社常務取締役本社技術部長

理学士 水野誠君

耐食耐熱合金の製造および研究に対する貢献

君は昭和 8 年京都帝国大学理学部化学科卒業後、同大学金相学教室に勤務、昭和 14 年日本金属工業株式会社に入社、昭和 18 年取締役となり昭和 33 年本社技術部長を兼務して現在に至っている。

君は日本金属工業株式会社に入社以来一貫して耐食耐熱合金の部門における本邦のパイオニアとして製造および研究に従事し、その進歩発展に貢献した。すなわち第 2 次大戦前においては、ニッケルおよびニッケル合金の輸入杜絶を見越し熱電対用アルメル・クロメル合金の製造技術、特に溶解方法を研究して国産化に成功し、戦中戦後の国内需要を同社で充足させることができた。戦時中には航空機用ステンレス鋼の生産に従事し、ニッケルその他の資材の不足にも拘わらず 18 クロム鋼などの各種耐食耐熱合金の製造技術を確立した。戦後、化学工業用またはパルプ製紙用設備資材としてのステンレス鋼の用途拡大に伴い高級耐食用ステンレス鋼の研究、製造を指導した。特に昭和 25 年頃合成繊維工業の勃興による需要の急増とニッケル不足に対処し含 Mo の高 Cr 低 Ni

新耐食鋼の基礎的研究を行なつて量産技術を確立し、就中日本特殊鋼管株式会社と協力、わが国最初の継目無ステンレス鋼管の工業的生産に成功した。本鋼種はニッケル不足の解消した今日でも化学工業の特殊用途に重用されている。また原子力工業におけるステンレス鋼の重要性に着目し、原子炉用ステンレス鋼の溶接、遠心鑄造法による製造の研究を指導した。一方實際使用面に対しては腐食問題を中心とし、化学工業を始めとする各業界の指導啓発、正しい使用知識の普及と耐食耐熱合金の利用の進展に努めている。

以上の如く、君の耐食耐熱合金の製造ならびに研究に対する功績は顕著であつて、日本鉄鋼協会表彰規程第6条の規定により渡辺三郎賞を受ける資格十分であると認める。

渡辺義介記念賞受領者

大阪特殊製鋼株式会社取締役技術部長

工学士 荒 木 透 君

鉛快削鋼の研究ならびに製造に対する功績

君は昭和 15 年 3 月東京帝国大学工学部冶金学科を卒業後、海軍に入り、呉工廠、技術研究所勤務を経て、昭和 21 年 3 月大阪特殊製鋼株式会社に入社、研究課長、工場長を歴任、昭和 29 年取締役となり現在は技術部長を兼ねている。

君は昭和 19 年頃から鉛快削鋼の製造および性質の改良に関する研究に従事し、まず軍用兵器材としての快削鋼の品質向上に成功したが、同時に鉄鋼中に鉛の分散する機構の物理化学的基礎について実験研究を進めた。昭和 23 年頃から鉛快削鋼を高級特殊鋼の分野で完成することに努めた。昭和 24~25 年度には高周波焼入れによる自動車部品に使用する特殊鋼の含鉛快削化に工業的に成功し、時計、カメラなどの精密工業に用いる鉛快削鋼の輸入防遏にも役立った。本研究による製造法および原理は、以前から存在した米国インランド・スチール社の特許による製造法とは着想を異にするもので、溶解現象よりの分散を利用し鉛を鋼中に微粒分布させようするため、わが特殊鋼業界の如き小鋼塊によつて高純度の特殊鋼を製造する国情に適している。昭和 30 年自動車用高級鋼を中心とする鉛快削鋼の実用化、普及に必要な総合的研究を完成、その後トヨタ自動車工業、本田技研工業、富士重工業、新三菱重工業、鈴木自動車などの各社に確定した需要を獲得し、従来の快削鋼では困難とされた重要機械部品に利用され高能率高性能を発揮している。

以上の如く、君はわが国における含鉛快削鋼の研究ならびに製造において開拓者の役割を果し、独自の着想により優秀な快削鋼の製造に成功した功績は多大であつて、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

渡辺義介記念賞受領者

八幡製鉄株式会社本社計画部技術調査課長参事

工学博士 一 戸 正 良 君

塩基性平炉操業の基礎的研究ならびに

品質管理方式の普及に対する功績

君は昭和 16 年 3 月九州帝国大学工学部冶金学科卒業 17 年 12 月日本製鉄株式会社に入社、八幡製鉄所技術研究

所に勤務、品質管理係長、冶金管理課長、技術管理課長を歴任、昭和 32 年 10 月本社に転じ計画部技術調査課長となり現在に至っている。

技術研究所在職中に君の行なつた塩基性平炉操業法、特に炉内装入物の配合計算に関する一連の研究は、その後における平炉操業法の指針となる重要なものである。君は、昭和 25 年八幡製鉄所に冶金管理課が創設されると同時に品質管理係長として、当時ようやく抬頭して来た推計学を基礎とする品質管理の実施に従事し、品質管理の普及、教育、作業の改善標準化に多大の業績を挙げ、わが国鉄鋼業の品質管理を如何に実施すべきかを確立する指導力の一つとなり、均一な成品の製造標準の確立に貢献した。八幡製鉄所が昭和 26 年デミング賞を、その後工業技術院賞、通商産業大臣賞を受賞したのも君の寄与したところ大きい。

よつて君は、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

渡辺義介記念賞受領者

太平金属工業株式会社取締役製造部長

井 上 繁 弘 君

耐酸高ニッケル合金鋼の研究 ならびに製造に対する功績

君は昭和 17 年山梨高等工業学校を卒業、直ちに海軍に入り技術少尉に任官、その後技術大尉に昇進、終戦まで海軍技術研究所において専ら特殊兵器の研究に従事したが、昭和 21 年太平金属工業株式会社に入社、爾来 14 年間技術面を担当し、今日同社の有する技術は君に負うところ大きい。すなわち従来伸銅を本業とした同社がステンレス鋼、特に高ニッケル合金鋼成品の製造に転換することを決定すると共に、卒先献身的努力を以て経営上の多くの困難を排除して転換を完遂せしめた。この間新製品に対する基礎的および試作研究から工業化まですべての面において自らこれに当り、成果を収めた。従来わが国における高ニッケル合金鋼の発達は遅々としたものであつたが、最近一大飛躍を遂げたのは君の努力に負うところ大きく、これはニッケル業界はもちろん耐酸耐熱合金を使用する各種工業界に裨益するところ大である。

以上の如く君の耐酸高ニッケル合金鋼の研究、製造に対する功績は多大であつて、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

渡辺義介記念賞受領者

八幡製鉄株式会社八幡製鉄所建設局次長参事

工学士 上 嶋 熊 雄 君

溶鋳炉、コークス炉および焼結工場の 新設ならびに改修に対する功績

君は昭和 12 年 3 月大阪帝国大学工学部冶金学科卒業後、日本製鉄株式会社入社、八幡製鉄所製鉄部に勤務、第2製鉄課長を経て、昭和 27 年臨時建設部製鉄設備課長、昭和31年9月建設局次長となり今日に至っている。

終戦後臨時建設部製鉄設備課長を経て建設局次長に至る間、君は、老朽、荒廃した東田第 3、4、5 溶鋳炉、洞岡第 1、2、3 溶鋳炉の改修および洞岡第 2、4 コーク

ス炉の改修を行なった。特に鉄皮式溶鉱炉の鉄皮取替に関する新改修法を確立し、短期間の炉体改修に成功した。また昭和29年にはマッキー式ドワイトロイド焼結機の建設の企画を担当し、特に従来の水冷または自然吸引式の冷却法を改め、世界でも最初の強制吸引式冷却装置を計画実施し、1500 t/日の焼結鉄生産を可能にし、これにより焼結鉄の多量装入による溶鉱炉作業能率の向上に貢献した。昭和31年以降戸畑鉄鋼一貫工場の基礎となる製鉄工場建設の企画推進を担当し、昭和34年9月1日わが国最初の1500 t 溶鉱炉およびその附帯設備を完成した。

以上の如く、戦後の八幡製鉄所製鉄設備の建設と改修に際し、これが近代化、合理化を達成しえたのは、君の卓抜した技術と新しい感覚によるところが多である。

よつて君は表彰規程第8条の規定により、渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

渡辺義介記念賞受領者

富士製鉄株式会社釜石製鉄所化工部コークス課長
尾崎利雄君

コークス炉の設計、建設ならびに操業に対する功績

君は大正12年官営八幡製鉄所に入所、昭和2年同所養成所、昭和6年教習所高等部卒業、昭和12年日本製鉄株式会社臨時建設局勤務となり、富士製鉄株式会社技術部洗炭コークス係長、管理係長、化工係長を経て、昭和32年1月釜石製鉄所化工部コークス課長となり現在に至っている。

君は八幡製鉄所に入所以来、主としてコークス炉の設計、建設に従事し、爾来30余年この道にたずさわり、わが国鉄鋼業におけるコークス炉の建設に多大の功績を残した。君が設計、建設した炉団は八幡、釜石を始め海外にもおよび、その数は数十にも上り、かつ、その間において数多くの考案を行ない、技術的發展に寄与した。特に大野宏氏の日鉄式コークス炉の発明に際しては、その設計に参画し、君の与つた力は非常に大きい。この炉式は、現在もわが国における製鉄所中の炉団数の大半を占めていることからその優秀性が証明される。君は現在釜石製鉄所コークス課長として、その豊富な経験を生かし、コークス炉の改善に研究を重ねている。

以上の如く、君は、コークス炉の設計建設ならびに操業に対する功績は多大であつて、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

渡辺義介記念賞受領者

株式会社日本製鋼所室蘭製作所製鋼課主任
工藤重蔵君
電気製鋼作業改善に対する功績

君は大正14年青森県黒石高等学校卒業後、株式会社日本製鋼所に入社、研究所分析作業に従事していたが、昭和19年製鋼課電気炉作業員に転じ、同30年4月電気製鋼作業担当の主任に任ぜられ、今日に至っている。

この間、分析工としては鋼中の微量アルミニウム定量法の基礎を確立し、また電気炉作業の担当係員としては、当時軍需省の憑愆に係る本邦電気炉特殊鋼溶解標準の原案の作成に当り、原材料入手困難な戦時の状況下にあ

つたにも拘わらず、本邦電気製鋼作業に多大な貢献をなした。さらに近時、需要者側の鋼材に対する要求度の高まるにおよび、非金属介在物の低減を目途としての精錬法の改善、研究に専念し、特に船用タービン部品、冷間圧延作動ロール、火砲粗材等、製造至難な鋼種に対し、成果を収め、功績多大なものがある。

よつて君は表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

渡辺義介記念賞受領者

東洋鋼板株式会社下松工場計測課長
理学士 竹本 国一君

ブリキ板ならびに薄板の製造工程における各種計測の研究およびその実用化に対する功績

君は昭和16年3月大阪大学理学部物理学科卒業後東京芝浦電気株式会社に入社したが、昭和19年5月東洋鋼板株式会社に転じ下松工場研究所に勤務、昭和34年5月製造部計測課長となり現在に至っている。

この間君は東京芝浦電気においては各種計測法の研究に従事し、東洋鋼板入社後はブリキ板製造に関する各種研究を行なつてきたが、昭和27年以降これらの経験に基づき、ブリキ板および薄板の製造における各種計測の改善に従事し、特にラジオアイソトープ利用の計測法の開発については、わが国における最初の研究ならびに実用化を行なつた。すなわち C^{14} 、 Tl^{204} 、 Kr^{85} などを用いた β 線スズメッキ厚み計、プラスチック・コーティング厚み計を製作して現場に使用し、また Sr^{90} 、 Fu^{106} を用いた β 線厚み計の製作および現場使用を行ない、ブリキ板ならびに薄板のスズメッキ量、プラスチック・コーティング量の管理および自動重量選別に適用した。これらの厚み計は従来の計測器に比べはるかに高精度である。自動選別ラインは β 線の利用により、シート状に切断された成品の正確な重量選別を表面を損傷することなく行なわせるものである。一方トレーサー実験によりブリキ板および薄板の品質向上に資した。計測課長就任後は新設タンデム冷間圧延機における X 線厚み計の使用および X 線厚み計を利用した厚み自動制御装置の整備ならびに改善を行ない、厚板の厚み分布の均一化およびオンゲージ量の増大に貢献した。

以上の如く君は、ブリキ板ならびに薄板製造工程における計測の研究および実用化に対する功績は多大であつて、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

渡辺義介記念賞受領者

住友金属工業株式会社鋼管製造所製造部次長
兼製鋼課長 工学士 谷口千之君
特殊鋼の製鋼技術の向上に対する功績

君は昭和15年3月東北大学工学部金属工学科卒業後、住友金属工業株式会社に入社、鋼管製造所に勤務、製鋼課長を経て、昭和33年10月製造部次長兼製鋼課長となり現在に至っている。

この間、君は継目無鋼管用の特殊鋼の生産、品質改善ならびに製鋼能率の向上、製鋼設備の改善に尽力し、現にわが国最大の50 t 電気炉の建設に従事している。戦後、火力発電用ボイラのクロム・モリブデン鋼鋼管の国

産化に当り、クリープ強度の高い材料を作るためのオーステナイト結晶粒の調整方法、非金属介在物の少ない鋼を作るための精錬方法など製鋼技術上最も困難な問題を解決して、輸入品にも優る鋼材の製鋼法を確立した。ボイラ用高級不銹鋼鋼管の製造については、ELC不銹鋼 18-8 Ti 不銹鋼、18-8-Cb 不銹鋼など従来ステイフェルマンネスマン製管機では製造不可能であつた鋼種についてガス含有量、砂疵の減少など溶解法の改善により品質を向上させ、多量生産を可能にした。最近においては、特に材質の優秀性を要求される原子炉用および航空機用の合金鋼鋼材の溶製法を確立してその国産化を進め、更に超臨界圧ボイラ用耐熱合金の国産化のため溶解技術を進展させている。

以上の如く、製鋼技術を向上させ高級特殊鋼の国産化を推進した君の功績は多大であつて、表彰規程第 8 条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資料十分であると認める。

渡辺義介記念賞受領者

日本ステンレス株式会社直江津製造所製造部長
工学士 持 館 英 康 君
酸素製鋼法による超低炭素 Ni-Cr
ステンレス鋼の製造に対する功績

君は昭和 15 年京都帝国大学工学部冶金学科卒業後、日本ステンレス株式会社に入社、直江津工場に勤務し、製鋼課長、研究課長、製造部次長を経て、昭和 33 年 12 月製造部長となり現在に至っている。

日本ステンレス株式会社は昭和 27 年わが国最初の酸素製鋼法による超低炭素 ($C \leq 0.030\%$) Cr-Ni ステンレス鋼の工業的製造に成功した。これは同君の指導によるものである。酸素製鋼法により超低炭素鋼を熔解する場合、吹酸後の鋼浴炭素量を $0.010\% \sim 0.012\%$ におさえる必要があり、このため鋼浴は相当長い時間 1900°C 以上に保たれ、炉床関係の損傷も激しいが、吹酸法の改善、吹酸による鋼滓への損失クロムの回収率の向上により連続溶解作業を可能ならしめたものである。吹酸時間の短縮、酸素原単位の向上を図り、クロム歩留も普通品 ($C \leq 0.08\%$) の 93.5% に対し、 92.1% と略々同率に向上せしめた。

以上の如く君の超低炭素 Ni-Cr ステンレス鋼製造技術の向上に対する貢献は多大である。よつて表彰規程第 8 条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

渡辺義介記念賞受領者

大同製鋼株式会社本社技術部次長
理学士 安 田 洋 一 君
鉛快削鋼に関する技術的研究および
工業化に対する功績

君は昭和 15 年 3 月東京帝国大学理学部化学科卒業後、海軍技術中尉に任官、海軍技術研究所、呉海軍工廠に勤務したが、終戦後、太平金属工業、製造部長を経て、昭和 24 年新理研工業株式会社に入社、冷延課長、技術課長を歴任、昭和 30 年同社と大同製鋼株式会社の合併後、星崎工場技術課長となり、昭和 35 年 2 月技術部次長となつた。

君は海軍時代から快削鋼の工業化に注目していたが、昭和 26 年頃から鉛快削鋼の研究に着手、製造法、切削性の基礎的調査を進めた。特許の関係上米国のインランドスチール社との技術提携の必要を認め、昭和 32 年協定を成立せしめた。翌年鉛快削鋼に関係ある欧米各工場を歴訪、その技術調査を行ない、帰国後工業化に努力した。すなわち鉛快削鋼製造の最重点である鉛添加法については、従来の鋳型添加法および取鍋添加法の長所を同時に取入れた独自の方法を樹立し、鉛の分布状態および地疵の点で従来よりも優秀な製品の製造を可能とした。また鉛分布その他の確性試験方式に統計技術を導入した。この結果鉛快削鋼の量産体制が確立され、自動車工業その他の産業界に本格的供給を始めた。さらに鉛と硫黄を複合した超快削鋼についてもインランド・スチール社よりの技術導入により、製造研究を初め現在までにほぼ完了している。

以上の如く君の鉛快削鋼の技術的研究および工業化に対する貢献は多大であつて、表彰規程第 8 条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

渡辺義介記念賞受領者

日本鋼管株式会社川崎製鉄所製管部製管第 2 課長
工学士 山 田 貞 雄 君
鍛接管製造技術の改良および発達に対する功績

君は昭和 17 年 9 月九州帝国大学工学部機械科卒業後、日本鋼管株式会社に入社し川崎製鉄所庄延部製管課に勤務、製管第 2 課鍛管係長を経て、昭和 32 年 7 月製管第 2 課長となり現在に至っている。

この間、鍛接管製造技術者としてその製造技術の向上に専念し、製品品質および作業成績の向上に多大の功績があつた。すなわち、戦後の不連続式直接設備の再稼動に当り、現場技術者として種々の改良を加え、戦前以上の技術水準まで高め、終戦直後の鋼管需要の増大に対応させた。またわが国最初のフレツムーン式鍛接機新設の際は、企画立案の中心となり、豊富な経験を生かして、その計画に遺漏のないものとし、順調な建設を進めた。稼動に当つては、米国と作業条件が異なり、特に加熱炉燃料に軽油を使用しなければならなかつたため、多くの技術的困難に直面したが、経験と努力により克服し、操業開始後 1 年で安定した成績を保持することができた。始動時の素材装入方法の改善による始動時間の短縮、素材寸法の改良、純酸素転炉製造法による素材改良事業など種々の改善を行ない、現在では米国を凌ぐ成績を挙げている。

以上の如く、君の鍛接管製造技術の改良発展に対する功績は多大であつて、表彰規程第 8 条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

渡辺義介記念賞受領者

東都製鋼株式会社技術部分析課長
工学博士 若 松 茂 雄 君
鉄鋼および塩基性鋼滓の化学分析法
確立に対する功績

君は東京府立化学工業学校電気化学科卒業後、日本特殊鋼管株式会社大湊工場分析係主任、中島重工業株式会社研究課長を経て昭和 24 年 10 月東都製鋼株式会社に

入社、現在技術部分析課長として活躍しており、特に學術の研究に対して真摯な態度で当っている。東都製鋼入社以来は終始一貫して鉄鋼の分析関係の業務に従事し、現場の日常分析作業の合理的改良を行ない、その基礎を確立すると共に幾多の優れた研究論文を発表している。君の発表した鉄鋼および塩基性鋼滓の定量方法は学振法

または JIS 法として採用されたものが多い。

これらの研究はすべて東都製鋼入社以来の比較的短期間に行なわれたもので、君の分析方面に対する才能を示すと共に、わが国鉄鋼技術の改良発達に寄与するところ多大である。よつて君は表彰規定第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

昭和34年度 (昭和34年3月1日から昭和34年2月29日まで) 事業報告および会計報告

事業報告

I. 会 議

本会運営上の会議を次の通り開催した。

1. 総 会

第 44 回通常総会 34年4月2日開催
議事

- (1) 理事、監事および評議員選挙 (当選者決定)
- (2) 昭和33年度事業報告、収支決算並びに財産目録の件 (承認可決)
- (3) 昭和34年度事業計画並びに収支予算の件 (承認可決)

2. 評議員会

第 1 回評議員会 35年2月23日開催

- 議事 (1) 次期理事、監事、評議員候補者推薦の件 (候補者推薦決定)
- (2) 昭和34年度事業報告、収支決算並びに財産目録の件 (承認可決)
 - (3) 昭和35年度事業計画並びに収支予算の件 (承認可決)

3. 理事会

34年3月19日、4月3日、4月14日、5月12日、6月9日、7月14日、9月8日、10月13日、11月10日、12月8日、35年1月12日、2月23日の 12 回開催し、毎月の事務並びに会計事項、会員の入退会その他一般会

務を協議決定した。

4. 編集委員会

34年3月24日、4月21日、5月26日、6月23～24日、7月28日、8月26日、9月29日、10月27日、11月24日、12月22日、35年1月14日、2月29日の 12 回開催し、会誌の編集方針、企画、掲載論文の選定、技術資料の蒐集その他会誌編集に関する一切の事項を協議処理した。

5. 企画委員会

34年4月28日、5月19日、6月16日、7月21日、10月20日、12月16日、35年1月19日の 7 回開催し、事業運営上の諸企画につき審議立案した。

6. 支部長会議

34年4月4日開催、本部の事業計画の説明並びに各支部の事業状況の報告があり、協会発展に関する件、本部支部間連繫に関する事項などにつき協議した。

II. 会 員

本年度において次の通り会員の異動があつた。

III. 役員および常置委員

本年度において下表の通り役員および常置委員の異動があつた。

1. 理 事

34年4月2日開催の第 44 回通常総会において任期満

異動	会 員 別	名 誉 会 員	賛 助 会 員	維 持 会 員		正会員	学 生 会 員	外 国 会 員	合 計	会員団体 組 織 数
				員 数	口 数					
昭和34年3月1日現在		19	38	社 175	口 898	5,735	268	29	6,264	80
入 会		+ 1		+ 8	+ 9	+ 364	+ 146	+ 4	+ 523	
退 会			- 4	- 3	- 12	- 151	- 16	- 2	- 176	
死 去		- 1	- 1			- 11			- 13	
転 格		+ 1				+ 86 - 1	- 86			
復 活						+ 2			+ 2	
昭和35年2月29日現在		20	33	180	口 895	6,024	312	31	6,600	82